



## 人の育成

### 安井大悟(やすい たいご)

#### 六百五十回大遠忌

親鸞聖人七百五十回<sup>だいおんき</sup>大遠忌ご法要を二年後にお迎えするにあたり、「平安学園の建学の精神」から見た「人の育成」について一考したく存じます。

旧平安中学校および旧平安高等学校は昨二〇〇八（平成二十）年四月一日より、龍谷大学附属平安中学校・高等学校と校名変更しました。来年（二〇一〇年）は、校名に「平安」を名乗って百年目にあたります。すなわち、親鸞聖人六百五十回大遠忌の記念事業が「平安」の起点であったことに思いをいたし、少しばかり校史を回顧します。

#### 私立平安中学校

平安学園の敷地は、平安京左京の南西部に位置します。<sup>ひがしいちにしがわそとまち注1</sup>東市西側外町にあたり、当時、<sup>いちのつかさ</sup>市司という役所が経営にあたった官営の市場がおかれたところだと考えられております。時代がくぐり、<sup>いち</sup>市の機能が<sup>おとろ</sup>衰え、一五九一（天正十九）年に本願寺が移転したころから江戸時代後期まで、一面の畑地でありました。

一方、彦根の地では、旧藩校<sup>こうどうかん</sup>弘道館の払い下げを受けて、滋賀県下各寺院の共立になる浄土真宗本願寺派の<sup>うぶごえ</sup>教校が産声をあげました。一八七六（明治九）年のことです。<sup>こんききょうこう注2</sup>「金亀教校」と名付けられました。国宝彦根城の別称が<sup>こんきじょう</sup>金亀城ですから、これにちなんだ校名になったものでしょう。

一九〇〇（明治三十三）年には、本願寺派の学校条例に基づき全国に十六置かれた仏教中学の一つとして、「金亀仏教中学」と改名されています。そして間もなく一九〇二（明治三十五）年、本願寺派が直接統括するにあたり、全国の仏教中学は五つの中学に統合改称されたのです。金亀仏教中学は「第三仏教中学」（東京が第一、福井が第二、広島が第四、佐賀が第五）となりました。

話はそれますが、東京の<sup>たかなわ</sup>高輪高校生徒会が夏休みを利用して、平安へ調査に来たことが十年ほど前にありました。『校章に用いられている本願寺の略式の<sup>じょうもん</sup>定紋であるところの菊くずしの二角が、平安のそれとなぜ共通なのか』についてでありました。この高輪高校こそ第一仏教中学を前身とする<sup>しょうさ</sup>ことの証左でありましょう。

さて、本願寺は、宗祖親鸞聖人の六百五十回大遠忌の記念事業の一環に、第三仏教中学校の<sup>注3</sup>京都移転

を集会(宗会の前身)において可決、一九〇九(明治四十二)年、大宮七条の現在地に校舎新築工事を始めました。王城の古名にちなみ、第三仏教中学は「平安中学校」を名乗ることになったのです。一九一〇(明治四十三年)年のことでした。

## 建学の精神

校名は前述のような変遷をたどりましたが、建学の精神は不変であります。「金亀教校」が百三十三年前、建学に際し目標に掲げた「人の育成」を現代語で表現すれば、「この法人は、とくに仏教精神に基づき情操教育を行うことを目的とする」であります。

「情操」とは、社会的価値をもった感情のことです。私見ながら「平安の建学の精神」を解釈してみます。

仏教的なものの見方や考え方のできる人になり、社会生活を営むうえで、この見方や考え方に立った行動が伴うことと、その人の周囲や関係する人々に対しても、その人の価値観が好ましく受け止められ、少なからず影響を及ぼすような生き方のできる人になること

教育現場では教育方針の呈示をもって、建学の精神の具現化を図っております。二〇〇三(平成十五年)は平安にとって学校改革の年でありました。百二十六年間男子校であったところを共学化したことも改革の一つでした。共学化に伴い、教育方針を簡単明瞭かつ平易に、また生徒にとって覚えやすく、さらに覚えた文言を糸口として自らの気づきに繋がるような表現を用いようと、宗教科の先生方と模索しました。そのうえでまとめたものが、「平安の三つの大切、ことば・じかん・いのち」でした。

## ことば・じかん・いのち

宗門校であります「平安」には、本願寺派の寺院後継者のみならず、他派や他宗の生徒、そして多くの一般生徒が学んでおります。もちろん宗門校であることを承知して入学しているわけですから、年間五回の宗教行事と週一回の仏参に出席を義務づけてはいますが、信仰を強要するものではありません。

「ことば」は心の頭れだから、心を調えることをまず実行しなさい。やさしいことば、丁寧なことば、それに正確なことばを遣いましょう。

日々の生活の中では「じかん」を大事にしなさい。今日すべきことを明日に延ばしてはいけません。今というじかん、青春というじかん、人生というじかんはそんなに長くはありません。

今は自分の「いのち」を磨くとき、磨き方は個々人で異なると思いますが、磨く人はあなたしかいません。父母や友達、先生に頼ってはいけません。あなたのいのちは、多くのいのちに支えられてやっと保たれていることを忘れてはいけません。実は仏様からいただいた、願われているいのちなのです。大

切に祈ります。

このように説きながら、建学の精神を具現化するめあてを生徒達に示しております。

## これからです

はたして、六百五十回大遠忌記念事業を踏られた集会は、金亀教校の建学の精神具現化にあたり、

英邁な達識をもって百年の計を描かれました。さすれば、七百五十回大遠忌宗門長期振興計画の目標

に掲げられた「人の育成」は、これからの百年に、規範たるべき人としての生き方を、宗門をあげて示すことでありましょう。

かくいう小職も、長く教育機関に身を置くうちに懶惰に傾き、世の中を慨嘆するばかりの姿勢に陥ってしまったと汗顔の至りであります。子どもを育てることがすべての大人の役目であります。その時、「リトマス紙はこどもの目」であることを忘れてはなりません。子どもが変わってきたのではありません。大人が変わり、子どもたちを変えてしまったのです。責任は大人の側にあります。明治を懐古するだけでは懦弱です。「世のなか安穩なれ」という大遠忌スローガンが包括する、私のしなければならぬことから始め、生きることの意義といのちの尊厳のうえに立つ「人の育成」に微力を尽くしたいと思います。

(龍谷大学付属平安中学校・平安高等学校校長)

注1 平安学園教育研究会研究論集 44

“平安京東市周辺の調査”。

注2 学園創立をこの年とします。

平安学園 80 年誌・100 年誌・120 年誌

注3 彦根の第三仏教中学の敷地は、現在、西中学校になっています。また、当時の講堂を中央町に移築したものが「金亀会館」として現存しております。

注4 学校法人平安学園寄附行為第 2 章目的および事業第 3 条

注5 『いのち』心のかげはしカード NO. 320 が、12 月 6 日仏教伝道協会から届きました。「私という存在は、この世に肉体がある時だけの存在ではないのです。私にはわからないだけで、私は私として過去にも未来にも存在するのです。それが『いのち』という考え方です」とありました。